

三国志の世界

渡 邊 義 浩

はじめに

みなさん、こんにちは。渡邊です。今日は、三国志のお話をさせていただきます。三世紀の中国を舞台に、黄巾の乱により後漢が滅亡する中から、二〇〇年の官渡の戦いで最大勢力の袁紹を破った曹操が魏の基礎を、その曹操を二〇八年の赤壁の戦いで破った孫権が呉を、孫権と同盟を組んでいた劉備が漢をつくっていくお話です。えー、と言っていたただかないと、話が續かないのですが（笑）。劉備が漢をつくった、という部分が高校の教科書と違いますよね。でも、蜀は地名であって国名ではないのです。諸葛亮が劉備を輔佐して建てた国の名は漢、あるいはすでに先漢・後漢という呼び方ができあがっていましたので、季漢（季は末っ子という意味）とも称していました。

台湾という国はありますか。そうですね。台湾は島の名前で、そこにある国家は中華民国です。では、日本で中華民国と呼ばなくなったのは、何年からですか。それは一九七二年。中華人民共和国との国交正常化を行った際、それまで中国

を代表する政権とみなしていた中華民国と断交しましたので、外交上、中華民国という国家は存在しないという立場を日本政府は取っているわけです。

では、劉備の漢（季漢）を蜀と呼ぶことにしたのは、誰でしょう。それは、『三国志』という歴史書を著した陳寿です。陳寿の『三国志』は、唐代では正史と呼ばれるようになりませんが、正史とは正しい歴史書という意味ではありません。書いてあることがすべて正しいわけではない。正史は、皇帝の伝記である本紀と臣下の伝記である列伝からなる紀伝体という書き方により、正統のありかを示す歴史書なのです。陳寿は、魏の正統を受け継ぐ西晋に仕える歴史家でした。したがって、魏書だけに本紀を設けるとともに、魏から漢への禅譲を認めないため季漢と称していた劉備の国の歴史を列伝だけかゝらなる蜀書として著したのです。

陳寿の『三国志』が魏を正統とすることに對して、十四世紀の元末明初に羅貫中という小説家がまとめたとされる『三国志演義』は、蜀を正統とします。陳寿の『三国志』が魏を正統としたことへの批判は、四世紀の東晋のころから始まっていたのですが、それを集大成したものは、十二世紀の南宋の朱熹です。朱子学をつくった朱子ですね。『三国志演義』は、それまで「語りもの文学」としてつくられてきた三国志の物語の非現実的な部分を歴史に近づける史実化とともに、朱子学に基づき蜀漢を正統とすることで、小説の地位を高めようとしたのです。その結果、『三国志演義』は、「七分の實事に三分の虚構」と言われる史実に近い歴史小説になりました。しかし、小説である以上、そこにはフィクションが含まれます。『三国志演義』に含まれる虚構は、ほとんどが正統である蜀漢の活躍のために用いられています。

わたしは歴史学が専門ですので、今日は歴史としての三国時代のお話をさせていただきます。ただ、それだけではつまらないでしょうから、最後に『三国志演義』の虚構のなかで、一番有名な諸葛亮が風を呼ぶ術についても触れさせていただきます。だきたいと思えます。

一、史の自立

それでは『三国志演義』の主人公である劉備の一生を追いながら、三国時代の歴史をみていくことにしましょう。劉備は、漢の宗室の流れを汲むと称していますが、その挙兵には一族が従っていませんので、社会の下層部の出身であることが分かります。そうした劉備を支えたものが、関羽と張飛でした。劉備はかれらと寢床を共にするほど密接な結びつきを持っています。『三国志演義』では、この関係は義兄弟として描かれています。かれらの武力を依りどころに、劉備は傭兵集団として群雄の間を転々とし、時折、根拠地を手に入れることもありました。ところが、「名士」と呼ばれる、のちに貴族となる三国時代の知識人層が劉備の集団には留まらなかったため、根拠地を保ち続けることはできませんでした。

こうした時期に、関羽・張飛と並んで劉備を支えた者が趙雲です。ただし、歴史上の趙雲の像を再現することは容易ではありません。それは、伝えられる史料により二つの趙雲像を描くことができるからです。

陳寿の『三国志』から描くことのできる趙雲像は、劉備の家族の護衛隊長です。最も有名な長坂で阿斗（後主の劉禅）と甘夫人を守ったことは記録されるものの、あとは曹魏への北伐で衆寡適せず曹真に敗れたこと、死去したのち順平侯を贈られたことが記される程度で、陳寿の評では、黄忠と並び、前漢の夏侯嬰（劉邦の御者）に準えられています。

これに対して、裴松之のつけた『三国志』の注に引く『趙雲別伝』からは、関羽・張飛と並ぶ劉備の股肱で、君主にすら諫言する知勇兼備の将という趙雲像を描くことができます。劉備は、関羽・張飛と同様、寢床を共にするほど趙雲を信頼しており、孫夫人が呉の官兵を率いて驕慢に振る舞うので、趙雲に奥向きを取り仕切らせました。趙雲はこれに応え、孫夫人が劉禅を呉に連れて帰ることを防ぎました。長坂とあわせて、二度も劉禅の危機を救ったこととなります。また、益州を平定した時には成都の土地・建物を分配することに反対し、関羽の仇討ちのため呉を討伐することにも反対していま

す。さらには、諸葛亮が北伐に敗れたあと行おうとした賞賜にも反対します。『趙雲別伝』において趙雲は、単なる武将ではなく、儒教を学んで政治を理解し、君主にすら諫言をする儒将として描かれているのです。

大きく異なる二つの趙雲像のうち、もちろん『三国志演義』は、『趙雲別伝』の知勇兼備の将としての趙雲像を選び、さらに立派に描いています。『三国志演義』はそれでよいでしょう。蜀漢を正統とする歴史小説なのですから。これに対して、歴史学は、どちらの資料が史実としての趙雲の姿をより正しく伝えるのかを検討しなければなりません。そのとき歴史学は、『三国志』・『趙雲別伝』のそれぞれが、誰によってどのような状況でいつ何を目的として著され、残っている文章はどのように伝わり、いかなる特徴を持つのかを考えていきます。このような作業は史料批判と呼ばれ、ランケによって確立された近代歴史学は、史料批判を根底に置くことにより、その科学性を保証されています。

『趙雲別伝』のような別伝とは、三国から東晋という短い期間に二〇〇種類以上も書かれた人物伝の総称です。『漢書』を著した班固が、国史を捏造していると収監されたように、本来、史の編纂は国家事業として行われるべきことでした。ところが、漢の崩壊と紙の普及、および儒教の危機により、史の編纂が容易になったのです。また、別伝のような人物伝が多く書かれたもう一つの理由は、「名士」の人物評価の不安定さにありました。この時代の知識人たちは、たとえば、諸葛亮であれば「臥龍（伏龍）」、荀彧であれば「王佐の才」といった人物評価を受けていました。しかし、こうした評価には、客観的な基準がなく、しかも、評価は恣意的で、人物鑑識家同士も対立していました。ところが、高い人物評価を得ることは、九品中正という、名声に基づき官位を定める官僚登用制度が行われたこの時代には、重要なことだったのです。そのため、有利な人物評価を得るために、多くの人物伝が近親者などにより捏造されました。『趙雲別伝』は、こうした本一種と考えられますので、史料としての信頼性は高くありません。『三国志演義』の趙雲像は、歴史上の趙雲の実像をあまり反映していません。

また、別伝のような不安定な史書の盛行は、裴松之の注を、これまでの儒教の注とは異なるものになりました。儒教の経典につけられる注は、音義を中心とします。たとえば『論語』の「温故知新」という経文のなかで意味がつかみにくい「温」という漢字に、「温は、尋なり」とその意味を解釈するような注です。これに対して、裴松之の注は、さまざまな史料を比較して、どれが正しいかを考える、という史料批判を行うようになりました。たとえば、劉備が諸葛亮を迎えるために三たび草廬を訪ねて礼を尽くした三顧の礼は、注に引く『魏略』という本では、行われなかったとされています。その記述を引用したうえで、裴松之は「出師の表」に三顧への言及があることから、『魏略』の記事よりも『三国志』の記事の方が信憑性が高いと判断し、三顧の礼を史実であるとしています。こうした史料の検討を史料批判と呼ぶのです。

ところで、中国の書籍分類法である経（儒教）・史（史学）・子（哲学）・集（文学）の四部分類は、魏晋期に成立したものです。四部分類の成立には、経の春秋略に含まれていた史が、経より自立したことが大きな原因となっています。史の自立の背景には、『三国志』の裴松之の注に見られる史料批判のような、史学独自の方法論の成立があったのです。史料批判はやがて中国学全体にも広まっています。

『三国志』につけられた裴松之の注は、『三国志演義』に多くの題材を提供するだけでなく、学術史上にも大きな意義を持っているのです。こうした史料批判や書籍の分類方法のことを中国学では目録学、あるいは校勘学と言います。目録学は、あらゆる中国学の根底に置かれる最も重要な学問です。三国志の世界は、それをわれわれに教えてくれるのです。

二、儒教の展開

いま、裴松之の話題の中に、三顧の礼が出てきました。流浪の末に劉備は、荊州で三顧の礼を尽くして「名士」諸葛亮を迎え、赤壁の戦いの後に荊州南部を領有して、蜀に入り蜀漢政権を樹立するのです。劉備の勢力を飛躍的に拡大させた

諸葛亮たち「名士」の有用性は、(1)グランドデザイン(集團の基本方針)の提示(草廬対、ふつうは天下三分の計といいます)・(2)外交能力の発揮(孫呉との同盟)・(3)地域支配の安定(諸葛亮に誘われた荊州「名士」の加入が、荊州南部の領有を安定化)にあります。そうした有用性は、かれらが儒教を学ぶことにより身につけたものです。

後漢で国教とされるまでに発展した儒教の教義を集大成した者が、鄭玄です。曹操のライバルである袁紹の軍師に招かれ、その経典解釈は曹魏で用いられました。『三国志演義』にも劉備の味方の大学者として登場しますので、ご存知の方も多いかも知れません。鄭玄は、『周礼』という経典を中心として、多くの経典を緻密に体系化しました。その結果として生ずる経典相互の矛盾を解決するため、孔子を神格化するなど宗教性の高い緯書を鄭玄は利用し、煩瑣で膨大な注を書きました。それは、学問的には非常に高い価値を持つものですが、それによって乱世がすぐに治まるような即効性はありません。一方、劉表のもと、後漢末では例外的に平和を保っていた荊州に集まった多くの「名士」や学者たちは、宋忠と司馬徽を指導者に、『春秋左氏伝』を中心的な経典とする荊州学を形成して、鄭玄の学説に対する異議申し立てを始めていました。それは曹魏に仕えた王肅へと継承され、緯書を否定するなかで朱子学へと連なるような「理」に基づく経典解釈がめざされていきます。

諸葛亮が学んだ儒教は、荊州学でした。諸葛亮の師である司馬徽は、自分たちを単なる学者とは峻別し、時務を知る俊傑と位置づけています。時務とは、その時々に必要なとされる実務的な能力のことで、後漢末では黄巾により乱れた世の中に平和を呼び戻すための能力を指します。諸葛亮は、鄭玄のように、経典の細かい解釈に夢中になることはありませんでした。経典に書かれている聖人の教えの本質を学び、それを実践することにより乱世を治めていきたい。こうした諸葛亮の抱負は高く評価され、諸葛亮は臥龍という人物評価を受けたのです。劉表の客将となっていた劉備は、この評判を聞きつけて、三顧の礼で諸葛亮を招きます。その仲介者が徐庶でした。徐庶は、荊州学の学者の中では珍しく社会の下層部の

出身でした。劉備と同じく出身階層の低い徐庶であれば、腹を割って劉備と話することができたのでしょう。徐庶は、劉備の信頼を得ると、諸葛亮を招くように勧めます。しかも、諸葛亮を連れてきて欲しいとの劉備の要望を拒否して、劉備自らが諸葛亮を訪れることを求めたのです。

当時、客将とはいえ左將軍の肩書を持っていた劉備が、無位無官の諸葛亮に三顧の礼を尽くすことは過礼でした。大袈裟な礼をあえて尽くしたのは、諸葛亮への厚遇の約束であるとともに、劉備の集団が関羽・張飛を中心とした傭兵集団から、諸葛亮たち「名士」を中心とした政權へと変容していくことを内外に宣言するためだったのです。

こうして劉備に仕えることになった諸葛亮は、蜀漢の建国を助け、劉備の死後はその子の劉禪を輔佐して、曹魏への北伐を繰り返し、漢の復興に命を捧げます。漢代の儒教は、漢を神聖な王朝とし、孔子は漢のために『春秋』を著したと解釈していたからです。したがって諸葛亮の行動規範は儒教、とりわけ荊州学の中心的經典であった『春秋左氏伝』に置かれていました。たとえば、劉備から遺孤劉禪を託されたときに答えた、「臣敢へて股肱の力を竭くし、忠貞の節を效し、之に繼ぐに死を以てせん」という言葉は、『春秋左氏伝』僖公伝九年を典拠としています。また、兵士の交替に際して示した、軍隊を運用するときには「大信」を本とすべきである、という原則は、『春秋左氏伝』僖公伝二十五年の原城の事例に依拠しています。さらに、恩赦の濫用は徳政が挙げられず威刑が立たない、としたことも、『春秋左氏伝』隱公伝十一年が典拠なのです。

このように諸葛亮たち「名士」を支えたものは文化、とりわけ儒教でした。後漢以来、二千年の正統思想となる儒教の理解なくして、三国志の世界を深く知り尽くすことはできないのです。

三、文学の宣揚

それでは、儒教だけで中国のすべてが分かるのでしょうか。劉備の前に立ちはだかった曹操と荀彧との関係から考えていきましょう。劉備における諸葛亮の役割を曹操のもとで果たしていた「名士」が荀彧でした。ところが、曹操は荀彧を自殺に追い込んでいます。それは、荀彧たち「名士」の存立基盤である儒教がもっている漢への支持が、赤壁の敗戦ののち、中国統一よりも漢から魏への篡奪を優先させた曹操には、妨げとなっていたからです。そこで、曹操は荀彧を殺害して君主権力の強さを見せつけるとともに、儒教の価値を相対化させるために文学を宣揚し、文学を人事基準にも適用して「名士」の存立基盤を揺るがそうとしたのです。ちなみに、文学を人事基準とする曹操の目論見は、唐代の科挙に継承されます。李白や杜甫は、風流で詩を読んでいたわけではなく、進士科という詩を試験科目とする科挙に合格するため、詩の勉強をしていたのです。

曹操が宣揚した文学は、その時期の元号をとって建安文学と呼ばれます。中国における文学の尊重は、建安文学から始まりました。それ以前、たとえば前漢の武帝に仕えた文学者の司馬相如は、漢の文学を特徴づける賦という美文の代表的な作者でしたが、武帝からは俳優や踊り子と同じ扱いを受け、知識人として尊重されることはありませんでした。これに対して、曹操の長子で魏を建国した曹丕は、『典論』論文篇のなかで、「蓋し文学は経国の大業にして、不朽の盛事なり」と述べています。文学は国をおさめるうえで重大な仕事で、永遠に朽ち果てることのない営みであると、文学はそれ自体として価値を持っていることを高らかに宣言したのです。

それでは、文学が儒教とまったく無関係に尊重されたのか、あるいは儒教から完全に独立していたのか、というところではありません。儒教一尊の価値観を持っていた後漢では、文学も史学と同様、儒教に従属していたのです。したがって、

尊重され始めたばかりの文学が、儒教を無視することはできませんでした。

現在まで伝わっている曹操の詩歌は二十三篇、その形式はすべて楽府です。楽府とは、笛を中心とした七種の楽器を伴った音楽をつけて、殿上饗宴の場で歌われる詩です。曹操は、自分のつくった詩を宮廷で歌わせることにより、自らの権力や威光、正統性を宣揚したのです。

『三国志演義』では、赤壁の戦いの前に歌われ、臣下から不吉だとされる「短歌行其の一」は、曹操の代表作です。

对酒当歌 人生幾何 酒に対へば当に歌ふべし 人生幾何ぞ

譬如朝露 去日苦多 譬へば朝露の如し 去日は苦だ多し

慨当以慷 憂思難忘 慨きて当に以て慷むべし 憂思忘れ難し

何以解憂 唯有杜康 何を以てか憂ひを解かん 唯だ杜康有るのみ

という有名な歌いだしから始まるこの詩は、続けて、

青青子衿 悠悠我心 青青たる子が衿 悠悠たる我が心

呦呦鹿鳴 食野之苹 呦呦と鹿は鳴き 野の苹を食ふ

と歌われます。日本も明治時代につくった建物に、この詩から名前をつけたのでご存知の方もいらっしゃるでしょう。曹操は、『詩経』鹿鳴の詩を踏まえているのです。鹿鳴館が、外国からの賓客をもてなす場所であったように、鹿鳴の詩は、賓客を迎える詩です。曹操は、儒教の経典である『詩経』を踏まえることで、自分の宣揚した新しい文化が、儒教に対抗し得る価値の高いものであることを示しているのです。こうした『詩経』の引用をしっかりと理解できていれば、『三国志演義』で不吉とされている

月明星稀 烏鵲南飛 月明らかに星稀にして 烏鵲南に飛ぶ

繞樹三匝 何枝可依

樹を繞ること三匝めぐり

何の枝にか依る可めき

山不厭高 水不厭深

山は高きを厭はず

水は深きを厭はず

周公吐哺 天下帰心

周公は哺を吐きて

天下心を帰せり

という最後の部分も、自らを周公に準えて、人材登用に努めていることを高らかに歌う曹操の政治的立場の宣伝であることが分かります。曹操の詩は、おのれの感情・正統性を歌いながら、政治的立場をも宣伝する、いまだ文学としての独立性の低い詩であったと言わざるを得ないでしょう。梁の『詩品』は、曹操の詩を下品と評価しています。

これに対して、曹操の三男である曹植は、文学的センスにおいて父の曹操・兄の曹丕をはるかに超える天才でした。曹植の詩によって文学は、儒教のくびきから抜け出すことができたと言ってもよいでしょう。しかし、曹植の才能は、魏で生かされることはありませんでした。曹操は、儒教を相対化するため文学を人事に利用しようとした。その意を受けて、曹植のとりまきの一人である丁儀が、文学を基準に人事を行っていきます。となれば、文学を宣揚すればするほど、後継者争いで曹植が有利になるわけです。これに対して、儒教を価値観の中心に置く「名士」は、『春秋公羊伝』の隠公元年という誰でも読んだことのある部分に書かれている嫡長子相続を典拠に、曹丕の後継を望みました。曹操は悩みます。後継者問題は、曹植がよいか曹丕がよいか、という個人の問題を超えて、文学を価値基準とする主観的で曹氏に有利な人事を行い皇帝権力を強化するか、文学の宣揚を中断して儒教に回帰し「名士」たちの要求に応じて政権に安定性を求めるか、という政権の路線選択の決断に直結することになったからです。

曹操は、結局、曹丕を選びました。天下は三分されているのです。君主権力の強化よりも、政権の安定性を優先せざるを得ません。こうして儒教に回帰した曹丕のもと、荀彧の娘婿である陳羣は、儒教を価値基準とする九品中正という官僚登用制度を制定して、貴族制の基盤をつくりあげていくのです。

三国時代における文学の宣揚は、こうして終わりを迎えます。曹操の文学をその政策の中で考えるように、文学の研究を行う際、その背後にうごめく政治的な背景も理解すると、文学研究がより立体的になると思います。

四、三国志演義の世界

難しい話が続きましたね。だいぶお疲れでしょうから、最後に諸葛亮の術を身につけていただいで終わることにしましょう。『三国志演義』のフィクションの中で、最も有名なものは、赤壁の戦いで諸葛亮が東南の風を呼ぶ場面でしょう。少し掲げてみます。

「七星壇に諸葛風を祭る」(『三国志演義』第四十九回)

火攻めには東南の風が必要であることを思い知り、気が塞いで寝込む周瑜。それを心配する魯肅に孔明(諸葛亮)は、「公瑾殿(周瑜)のご病気は、わたくしにも治すことができます」という。魯肅は、直ちに孔明を伴って周瑜の見舞いに行った。見ると、周瑜は頭から蒲団をかぶって床に伏している。「わたくしに一つの処方がございます。これにて都督殿(周瑜)の気も通じましょう」。「それをお教え願いたい」。孔明は紙と筆を取り寄せて、人払いをする。と、ひそかに十六の文字を書きしるした。「曹公を破らんと欲せば、宜しく火攻めを用ふべし。万事俱に備はれど、ただ東風を欠く」。書き終わって、周瑜に渡しながら、「これが都督殿の病源でしょう」。これを見て周瑜は仰天し、「なんと恐ろしい奴か。この上は実情を打ち明けてしまおう」と考え、笑いながら言った。「わたくしの病源をご存知であれば、どんな薬で治すのかを教えてくださいだきたい」。「わたくしは非才ですが、かつて不思議な人物より『奇門遁甲天書』を伝授され、風を呼び雨を降らせることができます。都督殿が東南の風をお望みなら、南屏山に台をお築き下さい。これは七星壇と申し、高さは九尺、三段に築き、百二十人の旗手をまわりに立たせるのです。わた

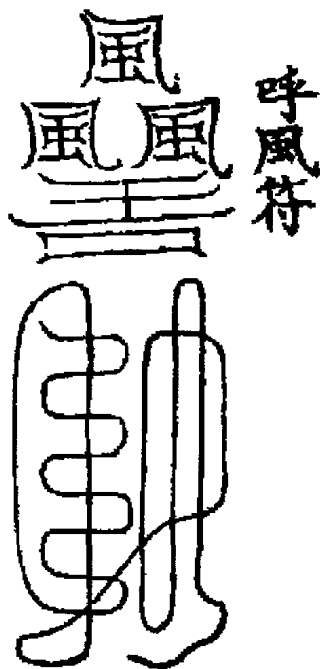
くしは、その壇上において法術を行ない、三日三晩、東南の大風を借りて、都督殿にお力添えをいたしましたしょう。孔明が風を呼ぶ舞台は整った。

このあとよいよ諸葛亮が、風を呼んで赤壁の戦いが始まるわけですが、諸葛亮がどのように風を呼んだのかについて、よく言われる、諸葛亮は季節はずれの風が吹くことを知っていた、という説明は正しいので(笑)、一番おもしろくないですね。せっかく小説のフィクションなので、真剣に楽しまなければなりません。引用した文章で、諸葛亮は、『奇門遁甲天書』を伝授され、それによって風を呼べると明言しています。それならば、当然『奇門遁甲天書』を探さなければなりません。きっと道教の經典でしょう。『三国志演義』に出てくる諸葛亮は、道士の格好をしていますから。

そう考えて調べてまいりますと、『三国志演義』がまとめられた明代には、『秘蔵通玄变化六陰洞微遁甲真経』(『正統道蔵』卷五百七十六)という道教の經典があります。遁甲しか共通しませんが、それに書かれた術を会得すると、六丁・六甲の神兵を使い、風を呼び、縮地の法を行うことができます、と書いてあります。『三国志演義』をお読みの方にはお分かりのように、すべて諸葛亮の使う道術ですよ。それどころか、『秘蔵通玄变化六陰洞微遁甲真経』には、この經典は諸葛亮が会得して使ったものだと書いてありますから、『三国志演義』の諸葛亮は、これを使って風を呼んだに違いありません。

この經典に記された符籙(おふだ)を使えば、六丁・六甲の神兵をあやつることができるほか、風・雲・雷・雨を呼び、木牛・木馬を使うことができます。図の「呼風符」は、風を呼ぶための符籙をコピーしてきただけです。これが書けなければ始まりません。風を呼びたい人は、練習してみてください。

ただし、おふだを書くだけでは、風は呼べません。風を呼ぶためには、



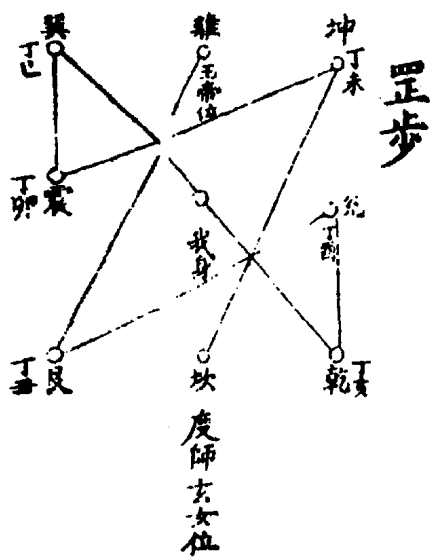
まず神を呼び出す必要があります。神を呼び出すためには、発爐というポーズを取らなければなりません。発爐とは、左手の中指を押し神を呼ぶ動作のことですが、口で説明しても分からない、と『秘蔵通玄変化六陰洞微遁甲真経』の作者も考えたでしょう。図が載っていましたので、掲げておきます。真似してみましよう。

みなさんで発爐をやっていただいたので、だいぶ神が降りてきたようです(笑)。そこで今度は、結界をつくって聖域を生み出さなければなりません。結界をつくるためには、罡歩を行います。罡歩は禹歩ともいい、北斗七星の形にステップを踏む足運びのことです。『秘蔵通玄変化六陰洞微遁甲真経』は、ご丁寧にも、足の動きを図にしておりますので、これも掲げておきます。

こうして結界をつくったあとには、邪魔をしに来る魔を払わなければいけません。破邪のためには、叩齒を行います。叩齒は、上下の歯をカチカチとかみ合わせることで、これは簡単に身につきます。寝ていて金縛りにあったときなどにも、やってみてください。たまに解ける時があります(笑)。うまくいかなければ、それは修行が足りない(笑)、ということにしてください。

以上で準備は完了です。あとは、呪文を唱えるだけです。ただ、危険なので(笑)、今日は、書いてきませんでした。二松学舎大学の図書館には、『正統道蔵』があるでしょうから、ご興味の方は、調べてみてください。びっくりしますよ(笑)。その理由は、説明しません(笑)。

現在の『三国志演義』には、こうした記述はありません。最初にお話したとお



り、『三国志演義』の著者とされている羅貫中は、儒教的歴史観に基づきながら物語を史実に近づけて、何とか小説の地位を高めようとしたのです。そのために、道教の教義をそのまま小説に載せることはしなかったのでしょう。こうして、『三国志演義』では、諸葛亮の『奇門遁甲天書』は由来の知れない魔術の書となっていったのです。

おわりに

三国志の世界と題してお話をさせていただきましたが、そろそろ時間となりました。三国志の世界を通じて、中国学というものが、はば広い知識を必要とすることが、ご理解いただけたでしょうか。ご自分の専門以外に興味を持たない。文学だから文学だけ、哲学だけ、書道だけ、ではもったいないですね。二松学舎大学というはば広く中国学を学べる場に入学されたみなさまですから、ご卒業までの間に、さまざまに中国を学んで、日本と中国の架け橋になっていただきたいな、と思います。本日は、ご静聴ありがとうございました。